

新教徒キリスト者・原爆禍中の無識慰撫化

山田 かん

長崎での第二回原爆研究会で発表された活水女子大学の服部康喜氏のレジュメを、会員の作家中里喜昭氏から入手した。「アメリカ占領下におけるプロテスタントキリスト者の原爆意識」と題されているが、キリスト者の原爆意識は、実はテーマとして戦後に挙ってきたことはない。その点画的なテーマであろう。同題の一部を「カトリシアン」と変えれば実像は変わってくるだろう。

これは永井隆をはじめとして、永井の多数のエピゴーネンが、論説なりエッセイなりで論じてきておるので言うまでも無い論題と思われる。ただし此れもカトリックのエリート層が示した、神の御恩寵なり神の御摂理なり、神のお恵みなり、はては神に捧げられた燃やされるべき^{こいつ}羔^{こいつ}、つまり燔祭の教義の概念を基盤に置いているごとくであり、ごく一般のカトリック信徒大衆の心情的意識としては、未解と言えるだろう。

私事にわたるが、わたしはレジュメ三頁九項にあげられている「再建近い聖公会」に関連を持つ者である。「日本聖公会長崎聖三一教会」に亡両親は大正期から教籍を持っており、一九七一年（昭和四六）一月刊行された『長崎聖公会略史』（永田友諒・高橋猛夫共著）にも氏名が記載されている。（以下略史とする。）

この教会には大正十五年一月から昭和三年まで、熊本から三浦清一牧師が赴任していた。その夫人が石川啄木が愛してやまなかつた妹光子（ミツ）である。光子は十九歳の時、小樽メソジスト教会で受洗、大正十一年、奈良聖公会から福岡へ移り、まだ伝道師だった二八歳の三浦清一と結婚。光子は伝道師であり三五歳になつていた。

三浦清一が牧会した大正十五年から昭和三年の間、会堂は信徒が増え、二〇五名を数えわき反つたと略史は記録している。旧長崎高商生や旧長崎医科大学生が多く入信したという。その後三浦牧師は教会を去り、飯塚の炭坑夫たちへの伝道に力を入れ、光子もそれに従つた。

三浦牧師は戦鬪的伝道者として、昭和十六年十二月、治安維持法違反で逮捕され、翌年六月まで熊本北署に拘留されている。戦後は社会党に入党し、昭和二六年四月、兵庫県議に社会党左派から当選し活動、昭和三七年七月、六八歳で死去した。一方、光子夫人は、夫は日本基督教団に移籍したが、光子は聖公会を貫き、いろんな社会事業、福祉事業に従事し、昭和四三年（二九六八）一〇月二一日、神戸で八一歳にて死去した。啄木は明治四五年四月、二七歳で没したが、彼が愛する光子を歌つた数首の短歌は、長崎につながる縁^{えにし}としても記憶されるべきものと思う。

／船に酔ひてやさしくなれるいもうとの眼見ゆ津軽の海を思へば／（一握の砂）

／朝はやく婚期を過ぎし妹の恋文めける文を読みりけり／（一握の砂）

／キリストを人なりといえれば妹の眼がかなしくもわれをあはれ

む／（悲しき玩具）

これらのことは長崎では余り知られていないので、聖公会にかかわるものとして記した。

なお附記しておきたいのは、冒険商人といわれたトーマス・ブレイク・グラバーの二男であるトミー・A・グラバーのことである。日本に帰化して倉場富三郎と称したが、聖三一教会の信徒であった。敗戦の八月十五日から僅か十一日目に自殺したが、帰化人として日英両国のはざままで、両敵性ととられる中での苦悩しつつの自死であった。

長崎にトロール漁法を導入したり、長崎近海で獲れる魚種八〇〇余種の全てを、地元の画家、中村三郎や栗原玉葉ら五人を起用して描かせ、見事な『グラバー図譜』を完成させた。長崎の貴重な文化遺産である。

本論の聖三一教会と原爆被災との関係であるが、略史に次のように痛恨のうちに記している。つまり「キリスト者の原爆無識」にかかわってあるだろう。

「……このような試練にある時、信徒は教会を思わなかったであろうか。松岡（安立）^{やすたつ}司祭が浜崎サク姉宅にその全家族と共に避難していることを誰一人知らなかった。その後、三菱職員の被災者を收容するミドリ寮に寮長として移り住んだ。米海兵団が上陸（注・一九四五年九月二三日、ハント少将麾下二万五〇〇〇の兵員）するや、その通訳となった。引きつづき軍政府が設置（注・一九四五年十月、出島、長崎税関ビルを接收、宣撫工作がはじまる）されるや、その通訳となって甚だ多忙であった。……」

略史にはなお詳細な記述として「教会堂の焼失」という項を設

けて記録している。

「……原子爆弾の炸裂によって爆心地から三キロの地点にあった長崎聖三一教会は、損害を被り、続いて起った大火災によって、焼失した。当時、松岡（安立）司祭が在任中であり、牧師館も勿論破損したが、倒潰にいたる程でなく、司祭夫妻は幸いにも微傷も負わなかった。爆発に引き続いて起こるかも知れない危害をさけるために、教会からかなり遠方にある防空壕に避難した。

その夕刻帰ってみると、礼拝堂も牧師館も全焼していた。建物の全部と教会設立（注・リギンス師ら創建の安政六年（一八五九）より八六年間の教会歴）以来の貴重な文書、教籍等記録全部を焼いたのである。」

この原子爆弾によって聖三一教会信徒二九名が生命を奪われた。わたしの幼児洗礼名もこの時焼失し不明となった。

この後、教会復興のためにアメリカの援助を受けるための嘆願がはじまり、アメリカ聖公会総裁主教の特使としてセーヤー博士が被害調査に来日したのは一九五三年（昭和二八）である。略史には第十二章として「米国領事館の買収と原爆記念聖堂の建設」を設け、並々ならぬ日米友好交渉が描かれている。

「十一月廿日セーヤー博士から航空便が届いた。それは米国聖公会が一万五千ドルで米国領事館を買収した。手続きを簡略にするために、米国聖公会が無償でこれを長崎聖公会に贈与する形式にしたい。九州教区に四万ドルを送金する約束であるから、教会土地が売られたならば、そのなかから一万五千ドル（五四〇万円）を教区に納めよという主旨であった。ついにわれわれの願いは達成したのである。……」

当時わたしの賃金は雇四級八号給六六五〇円であったから、これは多額の援助であった。しかも教会土地一部を毎日新聞西部本社が七七〇万円で契約が成立したというから、「……まだ米国人からの寄付金四〇万円を保管しており、教区に五四〇万円を納めても、教会資金として二七〇万円が残ったのである。」と記している。まるでイスカリオテのユダの銭計算のような様相の趣である。かくて一九五七年（昭和三二）常盤町五のアメリカ旧領事館が長崎聖三一教会の復興となった。

これら一教会史からみても、アメリカへの原爆意識は全くみられないということが、日常的通念としても認識できる。このことは戦後、対日援助としてガリオア資金、エロア資金などが送られたが、結局は日本に債務を課したに過ぎなかった。その中で一般民衆に親しかつたのはララ物資（アジア救援公認団体）が一九四六年から五二年にかけて四〇〇億円に達する物資援助を介しての人心への収攬、占領政策の効果として記憶すべきである。わたしも教会で二人が入るような巨大なズボンと背広を貰った。仕立て直して背広を着た初着となった。

これら事象は表題のキリスト者の原爆無識撫化効果の一端とも言えよう。全てが計量されておりアメリカ的プラグマティズムを表わしている。それをも人道主義の一端に加えるとしても、米国人の原爆無識とも底流的に繋がっていることは自明といえる。

核の廃棄がかくもとどこおって五十八年間を無為に過ぎ、地下核実験の上に又も、五月十三日の米露戦略核削減条約のマヤカシも、START IIを無視する無謀さにスウィッチされていることは間違いないだろう。全てが無識なのである。

思いついたことがある。NHK長崎放送が「長崎原爆の歌」として、一般も含む長崎被爆市民を対象に詩を募集して朗読放送したことがある。一九八〇年（昭和五五）八月にこれは一冊にまとめられ刊行されたが、この中でアメリカへの原爆意識の所在を検証してみたことがある。結果二〇八篇収録のうち、そのような明確な意識を表現したのは零であった。僅かに一篇／アメリカB二九 落せし原爆で／ああ無常にほろびゆく／規律やぶりてアメリカは／原子爆弾落せしに／なんとむごいことだろう／（土本ミツ）のことばを見つけた。

だから特にアメリカ表記でなくとも、原爆はアメリカに直結していることは間違いないだろう。例えば応募詩のなかで、／あじさいの花うなだれて／今日も降り続くつゆの雨／青紫にけむります／原爆の日がまた来ます／（岩本あい子）

わたしは内奥が語られないならば、それでいいではないか、と民衆の深いところでの、嗟嘆の思いを洞察するばかりなのである。